OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国人の基底をなしている思想 : 祖先崇拝・宗族・「孝」
Author(s)	坂出, 祥伸
Citation	中国研究集刊. 1996, 18, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国人の基底をなしている思想

——祖先崇拝・宗族・「孝」

坂出祥伸
（関西大学）

はじめに

今日の中心的な話題は、「宗族」を基底としている中国人の人間関係や、その中での生き方、考え方ということです。宗族がどのようなものかは、のちほど説明するとしまして、私がなぜ宗族に関心をもつようになったかのかを説明しますと、長い間、私は中国の養生思想ないし医学思想がどのようなものかを考えてきました。これは鍼灸や「気功」などですぐに理解できますように、人間の身体は「気」からなりたっていて、この「気」の流れをよくしてやれば健康な状態が得られるという考えが基礎になっています。

ところで、この身体を流れる「気」は、『荘子』などに見えていますように天や地の「気」と一続きのものです。つまり、日月五星から雲風雨など、およそ天にあるものすべて「気」の変化したものと考えられているのです。また、大地を流れている「気」もあります。それは、「龍脈」と呼ばれて、源を西方の崑崙山に発し、北・中・南の山系沿いに三条が東へ向かって流れ、それらの山系からさらにいくつもの支脈が分出して、中国全土のどこにでも、気が大地を流れていて、あたかも気のネットワークを成しており、そうした気脈の中で最も生気が集中している所を探しあてるのが「風水術」と呼ばれるものです。これはただいま日本でも大流行しています。ただし、この風水術は結婚占いや未来予知などとは関係のないものです。要するに、

墓や住宅や都市設計にかかわるものなのです。

私の研究の進展から、この風水が視野に入り、ここ四、五年来、沖縄・韓国・台湾のように現に風水術によって墓や住宅を建てたり都市設計をしている地域を調査してまいりました。特に台湾西海岸地域に住む客家の民宅を調査したことは、私に新鮮な驚きと新しい知見を与えてくれました。といいますのは、噂として、また書物を通じて、客家は教育を重んじ、一族の団結協力がきわめて強いということは知っていたのですが、そのことを象徴する「宗譜」という一種の家系図をどの家も持っており、またインタビューすれば、自分の一族の出世頭を誇らかに語ってくれるし、中には奨学金を出したり、海外に支部をもつ宗族もあるのです。こういう日本にはない緊密な人間関係の組織こそ、中国人の行動や思考の基礎になっているのではないだろうか、と私は考えるようになったのです。

I　父系血縁組織の結合力の強さ

ここでまず、今日の中国の実力者・鄧小平の一族が、どのように血縁を大切にしているかを示してみましょう。彼は四川客家の出身だとかいわれていますが、はっきりしたところは分かりません。彼の弟・墾はかつて重慶市長をつとめていたが、失敗があって失脚したところ、鄧小平から直接の電話による指示で武漢の副市長に転任ということで納まったとのことです。鄧小平の長男・樸方は北京大物理系の出身ですが、下肢麻痺の障害があり、中国残疾人連合会主席になっています。次男の質方はもと紅衛兵でしたが、アメリカに留学させて、ニューヨークのロチェスター大学物理系を卒業し、一九八八年には中国政府の出先機関である香港国際信託投資公司副総理となり、また首都鋼鉄公司の総裁をもつとめていて、先ごろ汚職問題で新聞にちらほら名前が出ています。長女の林は、中央美術学院を卒業した画家で、彼女の個展が日本・欧米で開かれ、その絵は親の七光りで高値がついたとかいわれていますが、一九八四年、北京市美術協会長、また東方美術交流学会長をつとめています。二女の楠は北京大物理系の卒業で、八八年に国家科技委員会社会発展科技司長になっています。このように鄧小平の直系親族でさ

え、国家機関の重要なポストが与えられているのです。なぜそうなるのか。ずいぶん古い、戦前の一九三五、三六年の調査ですが、オルガ・ラング『中国の家族と社会Ⅰ』（岩波書店、一九五三年）に、次のような興味深い一節があります。

華北のある進歩的な大学の一教授は、「親戚採用に反対するわれわれは危険な状態にあります。故郷の町に帰ったら追放されるから帰ることができないのです。世間はわれわれの冷酷さに憤慨しているのですよ」と著者（ラング）に語った。役人・技師・高級な勤人などは血縁や同族の者の厄介になって学校を出た者が多く、面倒をみた方は出してやった金を一種の投資と考えて、将来就職の世話をしてもらうという形でそれを返済させようという期待をもっているのである。だから、その期待にそうことを拒絶すればそれは信用を裏切る行為だとされたのである。

この文章は、中国人の人間関係を特徴づけるネポチズム（縁者びいき）の背後にある打算と利害を説明していると思います。ここでいう親戚というのは、おそらく宗族のことと思われますが、中国人が宗族的結合の中でしか生きてゆけない、立身出世するには、それを頼るしかないということを示しています。一九三一年に書かれた巴金の有名な小説『家』は、この伝統的な宗族的結合に妥協したり、うまく利用したり、あるいはこれを拒否し断絶するという、三様の生きかたを描いているのでありますが、宗族的結合が、人の生死にかかわる利害をともなうほどに、中国人にとり重くのしかかっているとすれば、それからの解放は容易なことではあるまいと思われます。

ここで、韓国における宗族的結合がもたらした悲劇的な一例を引用しましょう。周知のように、李氏朝鮮時代の一四世紀に、朱子学とともに宗族制が採用されて、本場の中国以上に徹底的に純粋に儒教国となったのですが、それを今日もなお引きずっている、というよりも国民道徳の根本理念としている国なのですが、第一一・一二代大統領となった全斗煥が、やがて失脚せざるをえなくなったのですが、その理由の一つが親族の不正事件でした。吉田博司『朝鮮民族を読み解く』（ちくま新書、一九九五年）は、全斗煥が宗族的結合

と大統領という近代的制度との間の矛盾に苦悩していたありさまをうまく叙述していると思いますので、すこし長いのですが引用しましょう。

為政者ですら宗族利己主義と国民の福利にはさまれ、どちらかの選択に迫られたときには、宗族を取らざるを得ない。つぎの全斗煥の失脚の際の謝罪文が、それを何よりも明瞭に物語ってくれる。

彼ら（宗族の者）はにわかに（私が）大統領になるや、初めの驚きと誇りが、時がたち周囲の誘惑がつづいて揺らぎはじめ、ついには色々な物議をかもすに至った。幼時に故郷を離れ、なにしろ大宗族だったので、名前や顔さえ知らない多くの親戚たちのなかで問題をおこす人たちに、「どうか自重してくれ」と何度もねんごろにお願いもし、取締まりもした。……多くの身内の者たちが刑事訴追を受けるほどに不正を犯し、国民の皆さまの怒りを買うようになったのは真に面目ないことだ。

（『韓国日報』一九八八年一一月二四日付）

韓国社会で宗族がいかに強固に機能しているかは、大都市の街角のそこここに「金海〇氏宗親会事務所」というような看板を見かけることによって分かりますが、そのうえに、『宗譜』と呼ばれる部厚い冊子がこの事務所で編まれているのです。この宗譜のことは後ほど説明します。韓国だけではなく、北朝鮮でも宗族が生き残り、宗譜をもっている人がいると、さきほどの古田博司氏は報告しています。社会主義社会は、宗族という古い人間的結合を断ち切らなければ成り立たないはずなのに、北朝鮮ではやはり続いているのです。宗族的結合は、国家という近代的な人間関係とは対立拮抗の関係にあります。人びとが宗族への愛に執着するかぎりは近代国家に不可欠な国家愛は容易に実現しないでしょう。そこで、韓国では第二代大統領の朴正熙時代に、壬辰倭乱の時に亀船を創案して海戦により豊臣秀吉の水軍を攻撃して何度も勝った李舜臣を尽忠報国・滅私奉公の精神を発揮した氏族の英雄だと賛美して、民族主義・愛国主義を鼓吹するとともに、一方、宗族祭祀の縮小簡素化を実行した、と古田氏は説明されています。

II　同類の「気」のネットワーク――宗族

それでは先ほどから出てきました宗族とは、具体的にどのようなものでしょうか。これは日本の家族というような小さな単位ではありません。父母あるいは祖父母をも含むこともありますが、さらにその子どもから成る単一の親族をイメージして思いうかべる日本型の家族とはちがっていて、同一の始祖にさかのぼることのできる同姓の男系血縁組織全体を包括しているのです。古代では、例えば『礼記』（大伝）では、同一の始祖から出た五世までの男系親族が血縁関係の範囲内でありますが、後世になると、五世を越えた遠い血縁の者をも宗族に含めるようになります。ただし、五世の範囲では、しばしば共住・共財・同爨という生活形態をとっています。その場合、四合院あるいはそれを上方または周囲に向けてさらに大型化した住宅で、三世ないしは四世、五世が同居する。こうした住居の最小単位は廂房とよばれています。これが日本での家に相当すると考えてよいようです。ここには、夫婦とその子女が住むのです。華南地域には同姓が集まった村落が多く、そのために「黄宅鎮」「鄭宅鎮」などのような村落名をもつところが多いようです。

このような宗族的な人間関係では、原則的に同姓不婚が守られています。始祖を異にする同姓、つまり同姓不同宗の場合でも、その結婚は本来は問題ないはずですが、今日でもなお嫌う傾向があるといいます。同姓不婚の原則は、戦前では五世以後とされていましたが、今日では三世以後の同姓の結婚は民法上禁止されているということです。この同姓不婚の観念について、後漢の班固は『白虎通』の中で、「同姓を娶らないのは、人倫を重んじ、淫泆を防ぎ、禽獣と同じなのを恥づるからだ」と説いています。しかし、これは儒教が成立して社会生活に深く浸透してより後の説明であろうと思います。より古くは、『国語』晋語の次のような説明の方が説得力があると思います。「異姓ならば、徳（はたらき）が異なる。徳が異なれば、類が異なる。……男女が交われば、それによって民（人）が生まれる」。男女は異類なのです。異類の交わりであってこそ、新しいものを生む、というのです。つまり、同じ宗族内の女性を娶るのでは、嫡子が生まれないのを恐れたのでありましょう。宗族の維持発展のためには、

嫡子がなければならない。『孟子』離婁篇には、「不孝に三つ有り、後無きを大と為す」とあります。嫡子が絶えるのは、不孝の中の最も重いものだとされているのです。

一方、先祖祭祀については、祭る側と祭られる側の鬼神とは、同類の気でなければなりません。同類であってこそ、気が感応するのです。『春秋左氏伝』僖公三一年には、「鬼神（つまり先祖の霊魂）はその族類（同族の類）でなければ、その祭祀を歆けいれない。」と記されています。後世、南宋の朱子も弟子との問答の中で、こうのべています。「問。子孫がその誠敬を尽くせば祖考（先祖）がただちに感応するという場合、〔そのときの気は〕空虚にある気でしょうか、それとも吾が身の気でしょうか。答。自分の気にほかなりません。思うに、祖考の気は己と連続しているのです」（『朱子語類』巻二五）。このように、宗族の同類か異類かは、気の感応をめぐる重要な問題を投げかけているのですが、同類感応、異類感応ということは、こうした人間関係をベースにして、物の変化とか天人相感とかに拡大援用されて、中国思想の中で大きな意味をもつようになります。

宗族的な人間結合にとって重要な観念は「孝」なのですが、それは生きている父母・祖父母・曾祖父母などへの奉養にとどまらないで、さらに遠い一族の始祖以下の先祖をつつしんで厚く祭るのも「孝」なのです。ですから、先祖祭祀が宗族にとって重視されるのです。けれども「孝」は単に子の側が父母・祖父母から始祖などの先祖に一方的に奉仕を求めているのではありません。日本では親の「恩」は海よりも深くなどといい、一方的に子の側の「孝」が求められているのですが、宗族制を基盤とする中国の人間関係では、「孝」への見返り給付の期待をともなっています。遠い先祖たちは、子の祭祀に対して感応して、現存の生者を守護し、さらに繁栄させねばなりません。生きている父母や祖父母も、宗族の団結や発展・相互扶助・子弟の援助に尽さなければなりません。後ほどのべます族譜とか族産とか義学といったものが、「孝」を実現するための手段になっているといえるでしょう。

宗族をもう一つ別の面、「気」という中国人固有の観念から考えますと、宗族は「気」のネットワークだ

と認識しているのではないかと思われます。例えば、明代の終わりごろの人で、フランスのルソーに譬えられることもあるという黄宗羲の『明夷待訪録』（原臣）には、「父と子は一気であり、子は父の身から分かれて、〔自分の〕身をつくっているのである」といっていますが、この父子関係を拡大延長したものが、宗族になるのです。

それでは、宗族という気のネットワークを強化し発展させるための具体的な道具立ては何でしょうか。それは宗譜・宗祠・族産の三つにまとめられます。

宗譜は族譜・家譜などとも称され、宗族の世系表・源流・祠記・墓記・族規・遺文などが記載されています。世系表は、一族の始祖から現今に至るまでの縦の関係と、同一世代の族人の中の横の関係、すなわち輩行を示したもので、これは宗譜の生命となるものです。しかし、一般に一族の始祖を誇張し自慢するのが常です。いま回覧しています『謝氏宗譜』には晋代の謝安という高名な文人が始祖だとされていますが、これは全くのデタラメでしょう。また、系譜につきましても古く溯れば溯るほど信憑性は乏しくなります。祠記といいますのは、次に説明します宗祠に関する記述です。墓図といいますのは、一族の先祖の葬られた墓の所在地とその坐向を示しています。坐向というのは、風水という一種の墓相術にかかわることで、墓がどういう地形の、どの向きに設けられているかを記載しているのですが、しばしば図によって示されます。遺文といいますのは、祖先の書き残した詩文を載録したものです。族規といいますのは、宗族内のさまざまな規約のことで、違反に対する制裁まで規定されていて、王朝もこれは承認しているものであります。

族譜編纂の目的は、多賀秋五郎氏の簡にして要を得た説明を借りますと、「宗譜は、宗族の血縁関係を明確にして、族人意識を自覚させ、宗族の栄誉や先人の業績を回顧して、活動意欲を昂揚させ、宗族の縦横につらなる体制を認識して、その秩序に順応させるためにつくられるもの」（『中国宗譜の研究』上巻、一九八二年）ということになります。宗族には本宗と支派がありますから、本宗には本宗譜もしくは大宗譜があり、支派には分宗譜もしくは支宗譜があります。

こうした宗譜には鈔本のものもありますが、近代に

なると多くは印刷されます。といいましても、宗譜は本来、一種の宗族内の内部資料として編纂されるものですから、族人つまり宗族に属する者にだけ配布するものです。ですから、大量部数印刷されることはなく（以前は百部を越えるものはまれだったといわれます）、まして族外のものには容易に入手できないのです。

宗譜は後で説明します宗祠の前で、その祭祀の時に、族長が読み上げて、先祖の遺徳をしのび、一族の団結と発展のために役立てるという例も報告されていますから、たんに族員の住居に大切に保管しておくだけのものではなさそうです。私が最近、台湾客家からいただいた宗譜には、現存する人々の顔写真・住所・現在の職業・地位・年令までが詳しく記載されているものがあります。これなどは、就職の世話・結婚の相手探しなど色々と役立つことが多いだろうと思います。

次に、宗族の祖先祭祀についてですが、これを行う場所は二つあるようです。一つは住居内の正庁（神明庁とも祖先庁あるいは祖堂ともよばれます）で、ここには先祖が神明（菩薩とか天神など一族の信仰している神）とともに祭られています。祖先の位牌すなわち神主が並べられているのですが、それでこれを家廟と呼ぶこともあります。家の中に設けられた宗廟という意味でしょうか。台湾を例にとりますと、毎日朝夕に線香とお茶を供え、節句や忌日には子孫が礼拝に集まり、結婚の時にはその報告をしたり、死者が出れば、まず遺体をここに安置しておく場所とされています。（末成道男「〈家祠〉と〈宗祠〉」『文化人類学』五、一九八八）。祖先祭祀の行われる、もう一つの場所は宗祠と呼ばれ、住居から独立した建物です。これは、祠堂とか宗廟とも呼ばれ、台湾では祖厝とも称されています。この宗祠はもともと家屋の内部にあったものが、明代中葉以降、宗族の繁栄にともない、内部では祭祀ができなくなって住居から独立したのだという解釈があります（劉黎明『祠堂・霊牌・家譜』四川人民出版社、一九九三）。しかし、この祠堂と家廟との間に、どのような違いがあるのか、神主をどう区別しているのか、よく分かりません。ただし、祠堂の方には、宗族の族員が春秋二回集まって祭祀を行い、それは主として儒教儀礼にもとづいているということですし、また、祭祀の後で有力な宗族は宴会を催したり芝居を

行ったりするそうです（未成・前掲論文）。今日、『礼記』『儀礼』などというような儒教儀礼に関する書物が、いわゆる「経書」と呼ばれて伝えられているのですが、その中には古代の宗族祭祀の実情をのべた所があるのですが、それははじめから儒教儀礼だとして考えるべきではなくて、宗族という周代の基礎的な人間関係の中で習慣的に行われていた儀礼なのだというように考えた方がいいように思います。

ついでに申しそえますと、私が専門にしていますのは道教ですが、これもまた、宗族制と深いかかわりをもっていまして、宗祠での祭りの後に催される芝居に道士が招かれる、あるいは、道教儀礼（斎法）そのものも、宗族あるいは、その上位の郷党で行われる祭祀儀礼にもとづいているように思われます。

宗族維持の道具立ての三つ目は、族産というものです。ひとことでいうと、一族共有の財産です。これは族人の誰かの寄附によるもので、その使途はあらかじめ詳しく規定されています。この族産は、家族ごとの私産に対する宗族全体のものですから、公産（台湾では公業）とも称されています。その内容は、祖先祭祀やそれにともなう宴会・演劇に要する費用を支出するための祭田、科挙試受験者への援助、族中の貧窮者への援助、老人へのさまざまな補助・慰労の費用に充当されます。富裕な宗族ならば族人の子弟を教育する義学も設けられています。今日の台湾客家では奨学金制度をもっている強力な宗族もあるようです。そうでなくても、前に引用したラングのインタビューに答えた大学教授の言葉のように、「血縁や同族の者の厄介になって学校を出た者」は、今なお社会的地位の高い人々には多いのです。これこそが、宗族を最も意味あらしめている重要な機能といえるでしょう。

宗族は、おそらく周代からあったと思われますが、牧野巽「儀礼及び礼記に於ける家族と宗族」（『支那家族研究』所収）もいうように、当時の宗族は後世（宋代以後）のそれに比べると小規模であり、その上、『儀礼』や『礼記』によると、宗法の統制力がゆるくなり、父母とその子からなる家（後世の房）の力が強くなった時代の状況を反映しているのが、『儀礼』や『礼記』に描かれている宗族のように思われます。しかし、『論語』子路篇にも、「宗族孝を称し、郷党弟を称す」と

ありますように、孔子の生きた春秋時代でも宗族は存続し、孔子は宗族内倫理としての孝を強化しようとしたのではないかと思われます。

しかし、宗族制がより強化されるのは、宋代以降のことで、科挙制が強化されて、官僚任用の唯一の制度とされたことと大いに関係があるようです。つまり、唐代は貴族門閥が政治の実権をにぎっていて、科挙出身者はあまり重視されなかったのですが、宋代になると文官コントロールが徹底されるようになり、科挙出身者が重視されるようになります。したがって官僚の世襲が不可能になったために、古くから存続していた宗族を再編強化させて、一族の子弟の中の才能のある者に教育をほどこして応試させ、官僚を間断することなく輩出して、官僚を実質的に世襲化し、一族の政界における勢力を維持しようとします。さきほど述べました義学というのは、この北宋時代に始まるものですが、范仲淹という北宋・仁宗時代の有名な宰相が創設しました義荘（義田と同じ）は特に有名なものですが、この義荘の中に義田、義宅、義倉と並んで義学が設けられ、この教育機関を通じて范氏はつぎつぎに官僚を出したということが知られています。宗譜の編纂ということにつきましても、宋代以前のものが、名望や貴族を対象にした官撰のものであったのに対して、宋代以後は、強化されました宗族が自前で編纂する私撰のものが主流になってきます。私たちが今日見ることのできる宗譜は、ほとんど明清時代のものですが、それはすべて私撰、つまり有力な宗族が自己資金で編纂したものです。なぜそういうことに莫大な金や労力をつぎこむのか。一族の機能の強化のためであり、最終目的は、官僚を輩出して政治的勢力をもつことですが、ただそれだけにとどまりません。官僚になれば、金銭的な見返りがあります。俸給以外の別途収入が多いのです。それにまた、権力によって一族にも、さまざまな形で便宜を与えることもできます。ですから、諺にも「一人道を得れば、鶏犬も天に昇る」とあるのです。商人や農民は、なんとかして官僚身分を得ようと躍起になります。

最初にのべました風水術が盛んになりますのは、この官僚制や科挙制の確立、さらに宗族制の強化ということと大いに関係があるのです。このことは、ちょっ

と首をかしげられるかも知れませんが、日本でも受験シーズンになると天満宮に願かけの絵札がたくさん掛けられたり、占い師のところに行く受験生が多い、ということと実は同じ事情なのです。科挙試の応試者を出す宗族にとって、また官僚としての昇進を期待する宗族にとって、一族の墓・宗祠・住居の風水は大いに気がかりなことではあるまいか。たとえ儒者は「怪力乱神を語らず」とはいうものの、それは表向きの態度であって、彼らは風水の良し悪しを、心ひそかに心配するのです。風水術の発展を宗族や科挙制などと関連づけた研究は、今までのところほとんど行われていませんが、両者の関連は十分考えられることですので、今後研究を進める必要があると思っています。

Ⅲ　現代中国における宗族の変化・復活

ここで現代中国と称するのは、社会主義体制下にある中華人民共和国のことです。社会主義体制にとっては、宗族などというものは本来、破壊すべき旧習俗でありましょう。かつて中国革命で、中国共産党の革命運動を率いた毛沢東は、一九二七年に書いた「湖南農民運動の視察報告」の中で、農民革命が祠堂・族長の族権をくつがえしたことを特筆してほめたたえていますし、このような宗族制打倒の方針が、その後の革命路線に採用されたということはいうまでもありません。祖先崇拝は封建的迷信であり、血縁共同体は、階級的区別に対立する封建的支配に役立つもの、とされるでしょう。特に、一九五八年に始まる人民公社運動の後には、宗族的結合は全く絶滅した、と思われるかも知れません。

ところが、橋本満・李小彗の調査報告「山東省小高家村」（橋本満・深尾葉子編『現代中国の底流』行路社、一九九〇）によれば、それは容易に破壊されなかったどころか、実際には、宗族的人間関係を利用して社会主義的農村運営が進められていたことがわかります。この報告の一部を引用しましょう。

この村（山東省小高家村）で互助組が作られた時、農民たちの組み合わせは、血縁関係に基づく親族組織、院（宗族に同じ）を基本になされたとも言う。（中略）農民たちは、この院の組織を使

って、生産用具の種類、労働力の多少、農民の分布といった条件を考慮して、イデオロギー的というよりも、かなり便宜的に互助組を形成した。

けれども、一九五四年以降の合作社を経て、一九五八年の大躍進（人民公社化）の時期になると、「労働面での院の機能は急速に失われていった。人民公社のなかで、院の機能は冠婚葬祭の面を中心として細々と生き続けたのであった」とのべられています。さらに文化大革命の時期には、「破四旧」というスローガンのもとに家譜（この地では宗譜のことを家譜という）は全部焼きすてられたといいます。しかし、大晦日から正月にかけての院の集まりは続けられていた、ということです。その院の集まりというのは、次のようなことです。

大晦日の午前中に、院の男たちは大人も子供も、朝から食べ物を一切とらず、長老（族長に当たるか）の家で供卓と呼ばれる机のうえに、線香を焚き、菓子などを供え、飾り物を飾りつける。用意ができると、供え物を持って墓へ行き、紙銭を焼いて、先祖の霊に向かって、「おじいちゃん、おばあちゃん、一緒に家で新年を迎えましょう」と語りかける、先祖の霊を迎えるための儀式である。……男たちは村の外へ出て先祖の霊を迎えるのである。大晦日の夜には、院の男だけが長老の家に集まり、かつては壁に家譜を掛け、現在は家譜はないが、酒や菓子などを供えて、代々の先祖がどのような人であったかといった話を長老から聞く。……生きている老人への尊敬の念を表すと共に、亡き人たちの霊を慰めるまつりなのである。

以上のようにして、文化大革命の期間でも細々と維持されてきた宗族制であったのですが、一九七〇年代末に人民公社体制が否定されると、家族を単位とする土地の再分配が行われ、再び院（宗族）の機能が全面的に復活するようになった、ということです。ですから、調査者が院の将来について農民に質問した時、一緒にいた陵県県長の息子（共産党員）でさえも、宗族を肯定的に認めて、「院というものは、永遠に続くものだ。姓が続きさえすれば、代が続けば、院は必ずある。終わることはない」と発言し、農民たちも賛成した、と報告されています。この調査は、宗族が比較的

弱体化している華北農村のものですが、そういう地域でも、宗族を完全に根絶することはできず、改革開放路線に変わった今日では、それが復活していることを示しているのです。

次に、宗族の強固な広東省の農村の例を紹介します。アニタ・チャン他（小林弘二監訳）『チェン村－中国農村の文革と近代化－』（筑摩書房、一九八九）という書物は、アニタ・チャンなどアメリカ人研究者が香港新界地区に近い広東省の農村チェン村から移住してきた二十六人にインタビューして、一九五〇年代から一九七〇年末に至る二十年間のチェン村の変革の状況を、物語り風につぶさに描いています。このチェン村は、広東省に多くある単一宗族から成り、五つの分派とそれぞれの祠堂、それらを統括する総祠、族譜、祠堂の共有地（公産）をもっているという、広東地域に典型的な村落だといえるでしょう。

ここでの宗族制解体は、次のような過程でした。まず、一九五〇年代の土地改革ですが、共産党の工作隊が、この村の陳蘇美という貧しい青年の協力を得て、土地の再分配とともに同族組織の解体を行います。同族とその分派の祠堂が所有している土地を貧農に分配し、祠堂は倉庫に転用されます。祠堂の祭祀も廃止します。村にある関公や家のかまど神などはすべて壊されました。これに代わって毛主席を信ずることが求められました。「毛沢東思想の威力と栄光は、伝統的な宗教行為の破壊によって生じた空白を埋めるものだと見なされたのである」と、この書物の著者は書いています。毛主席の語録や写真が、神の代わりにその位置に飾られるのです。しかし、人民公社化の時期に、生産隊を組織するにあたって、党書記をしていた陳慶発は自分の分派のために有利になるように図った、つまり同族意識にひきずられて階級路線にそむいたのです。そのために彼は、一九六五年の四清運動という幹部批判で、階級的立場を忘れたと非難され失脚しました。共産党員になっても宗族意識の抜きがたいことを、この事件は物語っていると思います。

しかし、宗族制を支える重要な精神的要素でありまず同姓不婚のタブーだけは崩壊したようです。その原因は、一つは、「大躍進時の無料の食堂は一時的に農家の生活水準を平均化したので、もはや家族が貧しい

ことは嫁を見つける際の障害とはならなかった」という事情があります。さらにもう一つは、「家系を継承する息子と孫息子をもつことが非常に大切である」と考える村民たちの宗族維持の観念の方が、同族内結婚のタブー観念よりも優先されて、村の共産党員か共青団員のような青年幹部たちは、すでに各地で伝統的慣習が破壊されているのを見て、「彼らは同族内の〝近親相姦〟に対する地方社会の制裁は無視できると計算した」というのであります。さらにいくつかの実利的理由がありました。結婚した娘が他村に出ていかないで近くに住めば親にとっては頼れる家が一つふえるとか、若い男性をもつ親は、当地の花嫁には他村から嫁に来る場合よりも安い結納金ですむということです。

文化大革命終熄の後、このチエン村にも宗族が回復し、共産党書記でさえ自分の同族分派や友人などへの利益を図るようになります。あたかも四清運動や文革など、全くなかったかのように、です。

ただし、同族内結婚のタブー観念からの解放だけは、おそらく進行し拡大していくことでしょう。鈴木満男氏による浙江省蒲江県鄭宅鎮の民俗調査「九世同居――中国浙江省の或る儒教家族の歴史――」（『思想』一九九五年三月号）にも、この問題を指摘して、次のようにのべています。

先祖祭祀にとって一層深刻な問題は、それ（先祖祭祀）よりもむしろ共産党の結婚政策にある。

三代以内の場合は別として、その範囲の外では同姓どうしもお構いなしとしたからだ。この措置は、時と共に宗族の大きな構造を破壊してゆくだろう。宗族を成立させる基本原理が、ほかならぬ《同姓不娶》だから。

中国の民法が、三世以内の同宗同姓に限って結婚を禁止（近親結婚の禁止）し、それ以外は自由にしたことは、確かに今後の中国の人間関係、社会構造を変化させていく大きなファクターになろうかと思います。ただし、法意識の変化は社会的慣習の変化に先行するのではなくて、実際はその逆になるのですから、何年先になって伝統的な人間関係が変り新しくなるのか分かりません。

Ⅳ　むすび

最近、中国の新聞雑誌を見ていますと、愛国主義が強調されるとともに、他方、儒教的精神の礼讃の論調も声高になっているのです。かつて毛沢東時代には、毛沢東個人あるいは毛沢東に象徴される共産党への崇拝や信頼が喚起されて、それが宗族的結合とか擬似宗族ともいえる同郷的結合を打破し、これらにとって代わるものとなっていたのです。毛沢東はかつては、民族とか国家のシンボルとしての役割をはたしていたのです。当時のスローガンに、こういうのがあります。

父親娘親不如毛主席親（父母の愛情も毛主席の愛情には及ばない）

母親只生下我的身、党的光輝照我的心（母さんは私の身体を生んだだけだが、共産党は私の心を輝やかしてくれた）

こうしたスローガンは今や過去のものとなりました。そこで儒教を中心にすえた愛国主義が唱えられているのではないか、儒教にもとづく国民の精神的一体化が求められているのではないか、と思われます。もしそうだとしましたら、それは矛盾をはらんでいると考えなければなりません。初めに指摘しましたように、宗族への愛は国家への愛に自然に拡大するのではなくて、しばしば対立をともなうからです。儒教は宗族制を基礎にして成立形成しましたが、今日でもなお存続している宗族制あるいはその擬制としての同郷意識に多分に依存して、儒教復活が唱えられているのではないかと思われます。そうだとすれば、儒教の強調は、形式面にせよ、ある程度破壊された宗族あるいは郷党、およびそうしたものへの忠誠や利益を復活させることにならないか、国民的結合を阻害することにならないかと思うのです。宗譜は文化大革命の最中に紅衛兵によってほとんど焼かれてしまったといわれていますが、しかし最近、宗譜の編纂が大陸で復活しつつあると聞きます。それが今日においてどういう意味をもつのか、将来どういう社会的役割を果たすのか、推測しがたいのですが、毛沢東とか鄧小平のような専制君主的な強力な指導者を失った後には、求心力がなくなって、宗族的、郷党的な社会に逆戻りしなければよいがと思います。少なくとも、その方向へ進む小さな芽はあると思います。

宗族という基礎的な人間結合の形式に視点を置いて、中国人とその思考を眺めると、だいたい以上申したようなことが私には見えてくるのですが、さらにもう一点だけつけ加えさせていただきます。

最近、中国との間に人の往来が盛んになり、中国人がさまざまな目的で日本に来るようになりました。このことは大いに歓迎すべきことだと思います。ところが、当然といえば当然なのですが、中国人に原因するトラブルで身許引受人に迷惑をかける、という話をよく耳にします。皆さんは単に習慣のちがいだから、しかたがないと思われるでしょう。最も多いトラブルの例は、中国人は一人を招くと、その身内や親戚がつぎつぎにやって来る、そのたびに、また身許引受人になり、収入証明書だの戸籍抄本だの住民登録などの書類を作り、入国管理事務局に行かなくてはならないし、その上、アパートの世話やその保証人にさせられる等々の煩わしい用事で、中国人に引きずりまわされる、もう、うんざりだというような愚痴をよく聞きます。確かに、こうしたことは習慣のちがいでしょう。しかし、その習慣というのは、心理的習慣であって、そのもとをたどると宗族制に行きつくのではないかと思うのです。つまり、科挙試に合格させ進士という最高身分にならせるために、一族は金銭的援助を惜しみなく与えるが、その人が立身出世したら、援助の見返りとして、一族の就職の世話その他さまざまの面倒をみるのが当然のこととして要求されるのです。そして、そういうことが一族の繁栄につながるのです。こういう心理的習慣、私はそれを「ぶらさがり根性」と称したいのですが、現在日本に来て住む中国人にも多かれ少なかれそれが潜在していると思うのです。経済大国日本に住めるというのは、彼らにとって正しく立身出世にほかならないのですから。それで、身内親戚を招くのは、中国人にとって当然果たすべき責務なのだと言っていいでしょう。中国人とのつきあいには、同じ顔をしているから、同じ考えかたをし、同じ行動様式をとるだろうと思うのは、大まちがいです。文化的社会的背景がまるで違うのだということを、しっかりと肝に銘じておくべきでしょう。以上のようなことも、宗族を念頭に置けば、わりとすんなりと説明のつく中国人の行動様式ではないでしょうか。

一九九五年六月八日

＊本稿は、一九九五年四月一五日（土）、大阪府日中友好協会主催の第一〇回中国文化フォーラム「中国人の生活の思想」で、「基底をなしている思想――信仰・宗族・「孝」――」と題して話した内容を整理清書したものである。

また、本稿は、市川国際奨学財団の平成三年度・四年度の研究助成金にもとづく研究課題「台湾における風水術の実態調査」の研究成果報告の一部である。同財団の御理解と御援助に深甚の謝意を表す。